

## 過疎はなぜ起きたのか

### A Study on Underlying Causes of Depopulation in Rural Areas of Japan

荻 大陸  
OGI Tamutsu

#### 要旨

1960年ころまでの日本の農山村は農林業が安定した生計基盤を形成し基幹産業としての役割を果たしていた。すなわち養蚕、薪炭、焼畑、牛馬が生計の主要な柱となり、特に前二者は農林業を代表する産品を生産するものとして、農山村を重要な産業基地たらしめていた。ところが高度経済成長がもたらした「生活革命」はこれらふるくからの農山村の生計基盤を悉く喪失させただけでなく、工業地帯生まれの夥しい量の新規の生活必需品の購入を農山村に迫るものだった。農山村は販売するものを失ういっぽう購入するものばかりが急増し、農山村の経済は一転して赤字構造に陥った。かくして過疎は始まったのである。

高度経済成長は「一億総中流」といわれる格差なき国民生活の向上をもたらした。しかし、その内実は農山村から都市部へと人口を流動・集中させることによる所得向上の達成であった。過疎は格差なき生活水準の向上のいわば代償といってよい。

キーワード: 過疎、農林業、生計基盤、生活革命

Keywords: Depopulation, Agriculture and Forestry, Means of Living in a Household,  
Revolution of Everyday Life

#### 1. はじめに

筆者は長年各地の農山村で実態調査をしてきた。そのなかで農山村の過疎の原因について筆者が常識的に理解してきたことが、じつはそうでもないことに気がついたのは、大学の授業で地域経済の講義を担当するようになってからである。講義のために地域経済に関するテキストとされるものをいちおうあたってみたところ、筆者が実態調査をとおして得てきた認識と他の多くの研究者のそれとがだいぶ異なることがわかったのである。そこで本論は、三たん（丹波・丹後・但馬）地域を典型例とし

て、農林業が農山村の基幹産業の役割を果たしてきたことを明らかにしたうえで、それを全国に拡張して見るができることから、過疎はなぜ起きたのかを描いてみた。

## 2. 基幹産業としての農林業

### —三たん地域の実態調査から—

1960年ころまでの三たん地域一帯は、かつては農林業を基幹産業としていた。農林業によって、この地域の人々の生活は安定した経済基盤のうえに営まれてきた。

筆者はこの地域において農林業で生活していた人々の聞き取り調査を多数行ってきたが、そこから明らかになった生計を支える主要な柱は四つあった。養蚕、薪炭、焼畑、牛である。

#### 1) 養蚕

養蚕は桑の木を育成し、その葉を採取し蚕のエサとして、蚕を飼って繭を生産する。生糸・絹製品はかつて日本を代表する輸出産品であったから、養蚕はこれを支えるこの地域の一大産業を成していた。

平成26(2014)年群馬県の富岡製糸所が世界文化遺産に登録されたが、蚕糸業の育成は日本の殖産興業の一環として国策によって進められ、明治後半から大正期にかけて日本を代表する輸出産業として発展をとげた。

最盛期の昭和初期には、日本は「世界の生糸生産額の三分の二を生産してそのほとんどを輸出し、わが国輸出総額の約三分の一を占め、外貨獲得のトップ産業」(『舞鶴市史 現代編』昭和六十三年 p 392)として君臨し、文字通りわが国を代表する基幹産業の座にあった。養蚕は北海道を除くほぼ全国の農山村で行われ(ただし北海道もまったく無かったわけではない)、また各地に大小さまざまな製糸工場が営まれるようになった。

丹波地域で有名なところでは綾部を本拠地とするグンゼの製糸工場があり、それに対抗するかのようには福知山では鐘紡の製糸工場が誘致された。いうまでもなくこの地域のほとんどの農家で養蚕は行われ、主要な生計の柱となった。

蚕の飼料となる桑は水はけの良い土地を好むので、傾斜地である山で育成するのに適していた。だからとりわけ耕地の少ない山村の重要な換金産物として、養蚕が盛んに行われたのである。

第二次大戦前までのこの地方の農業は、米作りが可能なところは水田として使われるほか、畑といえはイコール桑園といつていいくらい桑畑になっていた。

例外的に戦時中は食料生産が優先され、桑畑は強制的に制限され、食料生産のための畑に転換させられた。

## 2) 薪炭

薪炭の生産もまたこの地域で広範に行われ、養蚕と並ぶ生計の柱であった。山間部にいくほどとくに炭焼き専業で暮らしを立てている家が多くあった。昭和30年代前半のころまでは、生活用の燃料、つまり日常の炊事や暖房用の燃料は日本中どこでも炭、薪に大きく依存していた。炭や薪がいまでいえば石油やガスのように使われていたのである。

三たん地域は大消費地・京都へ燃料エネルギーを供給する基幹ルートのひとつで、山陰線はそのための大動脈として、いまでいえば石油のパイプラインの役割を果たしていた。ここの炭は山陰線の二条駅に集められた。二条駅周辺には炭問屋街が成立していて、ここが京都市中の燃料エネルギーの配給基地のひとつだった。

ちなみに京都市北部地域、鞍馬から花背峠を越えた一帯、花背やその奥の広河原や久多にいたる地域も京都市中への燃料供給基地となっていて、ここの炭は鞍馬に集められた。鞍馬もかつては炭問屋が軒を連ねた問屋街であった。鞍馬には現在山椒の佃煮などの店が軒を連ねているが、それらはかつては炭問屋を営んでいた。

明治32(1899)年に花背峠が開削されたあと、トラック輸送が可能となって花背地区の農協が木炭を取り扱うようになり、それまでの鞍馬出荷は農協出荷へと切り替わっていった。このため鞍馬の炭問屋は経営が困難となり、消滅してもおかしくなかった。しかし、かれらは炭に替わる新規事業として山林の恵みを生かし山椒の佃煮を商品化することで見事に業種転換を果たし、いまでは観光産業へと変革をとげた。現在の鞍馬はもうかつての炭問屋街の面影を見ることはない。

いっぽう、二条のほうはかつての炭問屋はなくなったが山陰線二条駅付近の電車内から木材業の看板をちらほら目にすることができて、いまなお木材業の街としての名残りをとどめている。

膨大な燃料需要を抱えていたから、三たん地域は燃料供給地として炭焼が一大産業となっていた。炭焼は、林業としては「薪炭林業」、つまり薪、炭を採るための林業を形成させた。第二次大戦前までの日本の林業は大半がこの薪炭林業であった。石油やガスが無い時代、日本中どこも薪、炭に依存した生活をしてきたから、それに対応して森林に対するニーズはなにより燃材を供給することが求められたのである。

広葉樹の森林、いわゆる雑木山から炭や薪用の材を採取し、その後は放置すると広葉樹林は切り株から次の世代が自然に芽を吹く、つまり萌芽する(これを萌芽更新という)。このため人手による植林の必要はない。伐って利用したあとは2~30年そのまま放置しておく、次の世代の木が自然に成長して再び伐採して薪炭を採ることができる。

短いケースでは10年以下というところもあったが、ふつうはおおむね2~30年で循環利用する。三たん地域の場合も2~30年サイクルの薪炭林業であった。薪炭林業は植林しないし、伐採までの期間とくに手入れの必要もないのでまったくコストがかからない。

スギやヒノキを植えるために地拵え（林地整理）をし、人手によって1本1本植林し、その後は下草を刈ったり（下刈）、収入に結び付かない間伐を繰り返す行方といった、経費多投型の、戦後一般化した人工林業とは似ても似つかないノーコスト林業—それが薪炭林業であった。これが林業の基本型であり、戦前期まではこれが日本におけるメジャーな林業だったのである。

### 3) 焼畑

薪炭林業と緊密な関係をもつ焼畑も重要な生計の柱のひとつであった。森林を伐って炭や薪として利用する。そしてその跡地に残った林地残材すなわち林地に残った枝葉を、よく乾燥させ火を入れて焼く。そこに農作物の種を播いて収穫する。

養蚕の盛んな地域ほど畑はまず蚕のための桑畑になる。三たん地域では畑イコール桑畑というところが多かった。すると田んぼ以外で食料生産を担える耕地というのは非常にかぎられる。そもそもこうしたところは田んぼじたいが少ない。しかし、耕地がなければ農作物が生産できないわけではなかった。それを可能にしたのが—森林で行う—焼畑であった。耕地は見当たらなくともそこに森林が立っていれば、そこが2～30年に一度・数年間食料生産の場として、焼畑が行われた（原野を利用した焼畑もあった）。

伐採後の林地において数年間、焼畑すなわち農作物の作付をした後、そのまま放置しておく先述したように伐り株から萌芽した次の世代の森林が再生する。そして2～30年後にまた伐ることができ、どのように焼畑をすることができる。こうして2～30年サイクルで森林を循環利用する。

焼畑も炭焼どうよう全国で行われていたが、三たん地域でもたいへん盛んであった。

『伊根町史 下巻』（昭和六十年）は、「炭焼は自然林を伐採して炭を焼き、その伐採跡を焼畑として利用してきた」（146頁）と記し、『夜久野町史 第一巻』（平成17年）では、『〔焼畑は〕当地方では植林の伐採跡とか薪炭材の伐採跡などを対象にかなりのムラで行われていた』（411頁）とある。ただし、なかには「この〔焼畑の〕慣習の全くなかった地域もあり」（前掲411頁）、例外もあった。

焼畑がこれらの地域で広範にふるくから行われてきたことを示すいい例が、焼畑を表す地元言葉の存在である。

たとえば『夜久野町史 第一巻』（平成17年）では「夜久野では高内・小倉・末・大油子や直見谷ではカリオと呼んだ。福知山の奥榎原でもカリオと呼び、火入れのことをカリオヤキという。兵庫県でもカリユとかカリオと呼称しているようであり、この呼称は丹波、但馬一円に広く使われていた」（411頁）という。

夜久野町での呼称に関していえば、夜久野町で実際に焼畑を行っていた住民からの筆者の聞き取り調査では、すべて「カリヨ」と呼んでいた。

やはり筆者の調査では、丹後半島のほうへいくと「カリユウ」と言い、そのなかでも伊根町あたりではこれが「カイリュウ」とすこし違った言い方になる。ただ、焼畑を何と言うかとの問いにははっきり

「カイリュウ」と回答するものの、土地の人間どうしの実際の会話では「ケエーリュウ」と訛った音になるようである。これらの言葉がなぜこのような言葉なのか、その由来も意味もいまでは分らない。ともかくそうとう古くから行われていたことが窺われる。

このように、実際に焼畑を行っていた地域では多くのばあい、それを示す地元言葉が有り、いまなお高齢者はそれを覚えており容易に聞き出すことができる。ただ後述するように、これらの地域ではすでに焼畑は途絶えており、現在カリヨ（カリオ）を知り、カリユウ（カリュウ）を知る高齢者が世を去ったあとはいったいどうなるだろうか。というのも、これらの地域の町村史を瞥見するかぎり、『夜久野町史』を別にすれば、焼畑に関する記述が多少含まれていても、そこにはいわば官製用語としての「焼畑」の語が出てくるのみで、貴重な土地の言葉の採録は見当たらなかった（なお『伊根町史 下巻』（p 146）には「刈畑」（焼畑）の語が見えるがこれをなんと読んだかにはふれていない）。

焼畑はしばしば焼畑農業とか焼畑耕作などと農業の一形態として扱われたり、そのように見られたりしている。しかし、そのような見方は誤りであって、焼畑はいうならば林業であって農業ではない。

その理由は、第一に焼畑は森林があつてはじめて可能なのであつて、森林が無ければ焼畑を継続することはできない。第二に、焼畑は林業という超長期の生産行為に組み込まれた林産物と農産物の複合生産システムの中の一ステージとして行われるものであり、したがっていふとすれば焼畑林業といったほうが適切だからである。

#### 4) 牛

農業には畜力が不可欠であつた。そのためこの地方では牛が飼われた。どの農家も最低一頭の牛を必要とし保有していた。たとえば福知山市のばあい、昭和30（1955）年には、農家「1戸当たり1.06頭の飼育割合で」あつたことが記録されている（『福知山市50年のあゆみ』昭和62年 p 249）。

牛は農耕用の役牛としての役割のほかにも、どうじに子牛を産ませそれを販売する「子取り」・（牛編に賣の字を書いて「こうし」と読む）「こうし」生産用でもあつた。この地域では牛を売買するための畜産市場がふるくから福知山市に開設され、この市場を通して全国に販売していた。これも農家の重要な現金獲得手段のひとつであつた。

現在のように牛を飼うのに飼料代をかける飼い方ではなかつたので、それはまるまる収入になつた。そのため採草場として「野山」（共有林）があつた。「野山」は柴草山、芝草山ともいい、主として肥料や、牧畜用の柴草を刈り取る山林原野（『峰山郷土史 下』昭和六十年 p 111）であり、「野山は薪・柴・肥草・萱・笹（屋根ふき用）などの農家にとって必需品の供給源として、地区民の共同利用にまかされ、その中に『刈畑』（焼畑）を設けることもあつた」のである（『伊根町史 下巻』p 146）。

上述した四つの柱はこの地域全体に共通する生計基盤だったといつてもよいが、地域によってはさらにほかにもそれらを補うものがあった。たとえば、福知山周辺では楮、三桠を原料とした和紙の生産が盛んだったし、福知山の隣りの綾部は和紙の里としていまも黒谷地区が有名であるが、かつてはこの地一帯で和紙生産が盛んに行われていた。

この地域では養蚕、薪炭、牛という換金産物を持つとどうじに、たとえ耕地がまったく無くとも山（森林・原野）に依拠した焼畑によって、あるていどの食料生産手段を有していた。言い換えると、農林業がしっかりと生計基盤となって基幹産業としての役割を果たしていたのである。

付言するなら、戦後の林業生産面では薪炭材のみならず、建築用材需要の爆発的増加を背景にいわゆる用材の占める役割が格段に増大したのであるが、これもまた生計基盤としての農林業の役割をいっそう高めるものであった。

そして以上の経緯・事情は三たん地域だけのことではなく、全国の農山村全般もまたどうようだったと考えられる。養蚕、薪炭、焼畑においてしかり、また西日本の牛は、東日本では馬に置き換えられるだろう。

### 3. 生計基盤の喪失

ところが、安定した生活を支えていたこれらの生計の柱が1960年代に入り、相次いで折れていく。

わが国の養蚕業のピークは昭和初期で、その後の世界恐慌から日中、日米戦争にいたる激動のなかで産出高の後退は避けられなかったものの、農山村経済を支える柱としての役割は、戦後もしばらくは変わらなかった。しかし、すでに戦前期に開発されていた化学繊維が、戦後大量生産技術を背景に安価に本格的に普及しだす。このため生糸・絹製品の需要は縮小ししだいに養蚕は後退を余儀なくされる。

福知山や綾部にあった製糸工場は1960年代に相次いで閉鎖や転換に追い込まれ、それとともに養蚕農家も減少の一途をたどった。

薪炭生産もほぼ同時期から後退を余儀なくされた。炭や薪に取って代わって、燃料エネルギーとしてガスや石油が使われるようになり、炭や薪の需要は急速に失われていった。このエネルギーの転換は燃料革命と呼ばれている。

そして薪炭生産が無くなるにつれそれと結びついて行われていた焼畑はすがたを消していった。

炭や薪に対する需要が失われるいっぽう建築用材の需要が爆発的に増加したことから、それまで薪炭用に利用されてきた広葉樹林をスギやヒノキ林へと改植・転換する拡大造林が全国的に進められた。このようなスギやヒノキを植林して育成する人工林業が薪炭林業の後継としてそれにとり代わることができればよかった。しかしそれは成功しなかった。林家のほとんどが人工林業に無知なビギナーだったことにくわえ、戦後長く続いた木材バブルという経営環境が本来高度な技術を要する人工

林業の難度をわすれさせた。かくして身についたイージー林業はバブルの崩壊とともに破綻し、悪夢から醒めた林家たちはなす術なく立ちすくんでいる。それが現在の日本林業である（荻大陸『国産材はなぜ売れなかったのか』日本林業調査会 2009年）。

農耕用として牛馬を飼うということも後退していった。1960年代後半から耕運機の開発・普及が始まり、農業の機械化が進展したからである。

和紙も安価な洋紙が大量に生産されるようになり、需要は激減していった。

このように、1960年代以降農山村地域の生計の柱はすべて折れていったのである。

高度経済成長と呼ばれたこの時代は、農山村経済を支えてきた生計の柱を折っただけではなく、それまでの日本人の生活を一変させてしまう変革をもたらした。

戦後間もないころまでの一般家庭にあった電気製品といえば、せいぜいラジオくらいのものであった。現在と比較すれば何もなかったといってよい。それが「三種の神器」といわれたテレビ、洗濯機、冷蔵庫にはじまる家庭電化の波は、つぎつぎと新規の商品を生みだしながら、怒涛のように生活の中に押し寄せた。いま、家庭にあふれている家電製品・機器類のほとんどは、この時代に登場したのである。

多種多量の電子電化の波に加え、車社会が到来し乗用車のみならず、農業現場には農業機械化の波が押し寄せ、農耕用の牛馬を駆逐していった。

これらが日本中に普及し、日本人の生活習慣・くらしを根底から変えたのが高度経済成長期であった。それゆえ、この時代は日本の長い歴史の中でも稀にしかない劇的な生活革命が起こった時代といってよい。そしてそのような視点で見通せば、農山村の生計基盤を悉く破壊した変動もまたこの生活革命に包含できるだろう。

日本人のくらし方を変えた夥しい新規の機器類は、農山村で生産されるものではない。ほとんどは都会の工業地帯で生産されるものであって、農山村の住民はそれらを購入しなければならない。

これを国と国との貿易構造の問題として捉えてみると、農山村はそれまで生産していたものの需要を失い、売るのが無くなってしまった。しかも他国で生産されるたくさんの新規商品を購入しなければならない。こちらから輸出するものが失われるいっぽう、輸入するものばかりが急増したのである。貿易は一方的な赤字にならざるをえない。この貿易赤字は、結局人売りをすることで決済された。

農山村から多数の人材が都会の工業地帯に流出していった。こうして現在みるように、農山村は過疎・高齢化に見舞われるようになったのである。

#### 4. 高度経済成長の光と影

高度経済成長は日本人の生活水準をおおきく向上させた。この間、日本は昭和39（1964）年に先進国クラブとされるOECD（経済協力開発機構）加盟を果たし、昭和43（1968）年にはGNP（国民総生産）世界第二位の経済大国となった。しかも、この経済成長を国民の経済格差をもたさずに実現したのである。

内閣府（旧総理府）の「国民生活に関する世論調査」では1960年代半ばには自らの生活水準を「中流」と考える者が8割を超え、昭和45（1970）年以降は約9割となるなど、高度経済成長は「一億総中流」といわれる格差なき国民生活の向上を実現したのであった。日本は社会主義国家が達成できなかった世界でも稀にみる平等社会を実現したともいわれたのである。

しかし、この「一億総中流」社会は激しい人口流動の結果によって実現した。「太平洋ベルト地帯」や「東京一極集中」は、まさにそれを象徴した言葉である。すなわち、「一億総中流」というのは農山村から都市部へ大量に人口を移動させることによって達成されたのであって、格差なき国民生活の向上はその光の部分のいっぽうで、過疎過密という影の部分をもたらした。

その後の過疎・高齢化、限界集落の危機等の問題の深刻さを前にするとき、その代償はけっして小さかったとはいえない。格差なき国民生活の向上はそのような代償の下に実現されたのである。

## 5. おわりに

冒頭で過疎がなぜ起きたのかについての筆者の認識は、それほど一般に流通しているわけではないことにふれた。たとえば、京都大学経済学研究科岡田知弘教授は京都新聞（2008年9月12日付）のコラム「私論公論」において『限界集落』のタイトルで、過疎のよってきた原因を次のように述べる。

「そもそも問題の根源は、高度成長期以来の農林産物の貿易自由化政策に続き、一九八〇年代後半からの輸入促進政策や製造業の海外シフトによる農林業、地域産業の全般的衰退によって人口が流出し続けたことにある。」（原文縦書き）

まずは高度成長期以来の政府の貿易政策が「問題の根源」だとしているが、なぜそうなのかはなんら説明されていない。的外れの冤罪といってよい。

このような実態とかけ離れた空論を振りまわしている結果、その処方らしき結論はといえば、

「EU諸国のように山間部条件不利地域の環境保全のための農家直接支払いや木質バイオマス、小型水力等の自然エネルギーの普及によって、穀物やエネルギーの自給率を引き上げ、雇用を増やし、温暖化問題にも対応する戦略的地域政策に転換すべき時機である。」（上記コラム）

とはなはだ捉えどころのない流行りことばの羅列に終わっている。

高度経済成長期の生活革命の破壊力は想像を絶するものだった。農山村がふるくから供給してきた製品の需要を失わせたうえ、農山村に膨大な新規商品の購入を迫る大津波となって襲いかかった。これが一気に短期間に押し寄せたことに農山村は対応し切れなかった。

しかし、症状はたしかに深刻ではあるが、原因はいたって単純明解である。ゆえに、処方もわかりやすい。要は、売れるものを失ったのだから、新しく売れるものを作るしかない。農山村は必死になって新たな製品・サービスを開発し、販売できるものを手中にする。それ以外に過疎を止める方策はないのである。



《参考文献》

- (1) 『舞鶴市史 現代編』昭和六十三年
- (2) 『伊根町史 下巻』昭和六十年
- (3) 『夜久野町史 第一巻』平成17年
- (4) 『福知山市50年のあゆみ』昭和62年
- (5) 『福知山市史 第四巻』平成4年
- (6) 『峰山郷土史 下』昭和六十年
- (7) 『網野町誌 中巻』平成6年
- (8) 岡田知弘『限界集落』2008年9月12日付「京都新聞」
- (9) 農林省山林局『焼畑及切替畑ニ関スル調査』昭和十一年
- (10) 下河辺淳『戦後国土計画への証言』日本経済評論社1994年
- (11) 荻大陸「京都市北部山間地域の社会経済構造とその変化 第1節 左京区花背地区」(京都大学農学部森林経  
理学研究室『平成5～7年度・京都市地域研究助成金研究成果 京都市北部山間地域における滞在型ツーリズ  
ムの可能性に関する研究』平成8年 所収)
- (12) 荻大陸『国産材はなぜ売れなかったのか』日本林業調査会 2009年
- (13) 荻大陸「焼畑と農林業」京都創成大学紀要第8巻第1号 2008年

